

【学術論文】

環境保護行動と子どもの頃における自然体験 — 家族関係の観点から —

保坂 稔*・佐々木 裕**

Significance of Nature Experiential Activities in Childhood to Environmental Conservation Behavior From the Perspective of Family Relationship

Minoru HOSAKA and Hiroshi SASAKI

Abstract

Many researchers insist that environmental education in childhood is important for environmental protection. This paper analyzes the relationship between environmental conservation behavior and family relationship from the perspective of nature experiential activities in childhood by using the data of 269 university students in Nagasaki.

It is clarified that the viewpoints of nature experiential activities in childhood and family relations are effective for environmental conservation behavior. Moreover, the more one has brothers or sisters, the more one shows environmental conservation behavior.

Key words : Environmental Conservation Behavior, Family Relationship, Nature Experiential Activities

1. はじめに

環境保護の促進要因に関する量的分析については、社会学や社会心理学の領域では、権威主義的態度の視点から検討を加えた吉川徹(1998)の研究や、環境配慮行動との関係でモデル化した広瀬幸雄(1995)の研究は先駆的なものといえる。吉川は、反権威主義が環境保護意識を高めるといふ知見を見出している。また広瀬は、環境ヴォランティアを促進するための方策について、社会的ジレンマ論やコミットメントの視点を用いて分析している。

さて近年では、環境保護行動の形成要因を分析す

るにあたって、子どもの頃の自然体験に言及する研究が質量問わずなされてきている。質的研究では、たとえば岡田成弘は、量的調査及び質的調査(自由記述)を用いて、少年期の野外におけるキャンプ経験が、成人期の環境行動に影響を与えることを明らかにした(岡田[2008])。少年期の自然体験については、環境先進国とされるドイツにおける「ワンダーフォーゲル」や「シュタイナー教育」が環境教育の例として紹介されているが(たとえば、今泉みね子[2003])、野外保育は自然の中で保育を行うために、環境教育を施す可能性も秘めている。保育研究の立場では、細野一郎が次のような指摘をしている⁽¹⁾。

* 長崎大学大学院水産・環境科学総合研究科

** 長崎大学大学院生産科学研究科

受領年月日 2010年10月25日

受理年月日 2011年5月30日

保育の基本は直接体験を重視するところにあるが、特に自然との触れ合いは、感受性豊かな幼児期にとって大きな意義を持っている。全身で自然

を感じ取り、全感覚を通じて自然の息吹を知ろうとしている。わずかなシグナルにも敏感に反応し、その印象は彼らの深奥に永く留まり、人格形成に永続的な影響を与えることになる。(細野[2004:16])

自然と直接に触れ、感受性を高めるにあたって、幼児期の体験に意義があるという細野の指摘に筆者らは賛成である。幼少期の自然体験の重要性は、以上のように多くの研究で指摘されている。

環境教育に関して量的研究の成果についていえば、子どもがいる母親を対象とした量的調査がみられる。たとえば田尻由美子は、母親の環境活動への積極的な参加が、子どもに影響を与えると指摘している(田尻[1994])。環境社会学の領域についていえば、立石裕二は、子どもの頃の時代背景(たとえばオイルショック)が、環境問題の捉え方に影響することを見出している(立石[2008])。理系の研究者によるものでは、たとえば浅香英昭による中学生を対象とした研究が挙げられる。浅香は、量的調査の結果から、ビオトープ経験を取り入れている小学校卒業生と、取り入れていない卒業生と比較をし、必ずしも仮説どおりではないものの、環境意識の形成にビオトープ経験が一定の成果があることを見出している(浅香[2010])。

さて宮川雅充は、大学生を対象とした量的調査の結果から、「子どもの頃、家庭で節分・彼岸・節句などの季節の行事はあったかどうかについては、……独立に環境配慮行動の実践につながっている場合が多いと考えられる」(宮川[2010:52])と指摘している。「子どもの頃の家庭環境や自然体験が、環境配慮行動や社会活動の実践に影響を及ぼしている」(宮川[2010:47])といった指摘を、量的調査を踏まえて見出した点について筆者らは評価したいが、環境保護意識を交えての検討とはなっていない。また、筆者らの考えによれば、「子どもの頃の自然体験」の促進要因を検討するにあたっては、兄弟数やしつけといった家族関係までを考慮する必要がある。家族での自然体験は、たとえば兄弟が多い方が、兄弟だけで空き地で遊んだりというきっかけだけでも増える可能性があるためである⁽²⁾。家族での自然体験そのものも環境保護行動を検討するにあたって重要な視点となるだろうが、家族での自然体験がどのようにして促進されるかについては、これまでほとんど分析されてこなかった。筆者らは、家族での自然体験の形成要因として、前述のように兄弟数やしつけも挙

げられると考えている。

本稿では以上のような状況を踏まえて、学生意識調査に基づく量的データを用いて、環境保護行動と子どもの頃の自然体験の関係について、環境保護意識や家族関係を交えて検討する。環境保護行動の形成要因として、子どもの頃の自然体験に加え、兄弟が多いこと、さらには環境保護意識が挙げられるという筆者らの仮説を示しておこう。兄弟数については、人数が多い方が外に遊びに行く機会が増えると考えておくことにしたい。しつけについては、しつけがある家族のほうが自然体験に連れ出す可能性があると考えておくことにしよう。筆者らの仮説のように、兄弟が多い方が環境保護行動を促進するという結果が得られたとしたら、少子化は環境保護行動にとってマイナス要因になるといえるだろう。少子化が著しい日本において、環境保護を考える際に少子化という人口問題についても考慮する必要があるが出てくる。なお本稿では、「子どもの頃」という定義については、幼少期から小学校の期間を設定している。子どもの頃の自然体験をいつ行ったかについて、量的調査の中で正確に回答を求めるのは困難と考え、幅広い期間を設定することにした⁽³⁾。

検討にあたっては、「環境保護に関する学生意識調査2010」で得られたデータを用いる。この調査は、A大学の1年～2年生269名(男性135名、女性129名)を対象とし2010年7月に実施された。以下、2節では尺度を導入し、3節で検討を行うことにしたい。

2. 尺度の導入

環境保護行動については、宮川(2009)や無漏田芳信(2003)を参考にし、「あなたは、次のような行動をしていますか」という質問に対し、「行っている」「少しは行っている」「あまり行っていない」「行っていない」という4分位で回答を得た(「行っている」を4点、「行っていない」を1点)。質問項目は、「a.ゴミの減量」「b.エコバックの持参」「c.コンビニでレジ袋を断る」「d.マイ箸の持参」「e.牛乳パックのリサイクル」「f.公共交通の利用」「g.冷房設定温度の注意(冬20度以下、夏28度以上)」の7つである。

環境保護行動について主成分分析をした結果は、次の通りである(第1, 2表)。第1表, 第2表によれば、環境保護行動の質問項目において、1つの主成分が抽出された。以下、第1主成分を尺度として抽出し、主成分得点を用いてこの概念を数値化し、議論を進めてゆく。

第1表 環境保護行動の主成分分析

	成分
	1
a.ゴミの減量	.566
b.エコバックの持参	.781
c.コンビニでレジ袋を断る	.622
d.マイ箸の持参	.592
e.牛乳パックリサイクル	.478
f.公共交通の利用	.492
g.冷房設定温度の注意	.512

第2表 環境保護行動の寄与率

成分	固有値	
	合計	累積%
1	2.402	34.309
2	.974	48.218
3	.951	61.806

環境保護意識については、吉川（1998）や保坂（2002a）がこれまで用いたものを利用した。環境保護意識の項目についても主成分分析を施した。結果は、次の通りである（第3、4表）。

第3表、第4表によれば、環境保護意識の質問項目において、1つの主成分が抽出された。以下、第1主成分を尺度として抽出し、主成分得点を用いてこの概念を数値化し、議論を進めてゆく。

第3表 環境保護意識の主成分分析

	第1因子 負荷量
イ. ゴミの減量化に役立つのであれば、 ゴミ処理の有料化もやむを得ない	.308
ロ. エネルギー資源保護のためなら、便 利さや快適さを犠牲にしてもかまわ ない	.815
ハ. 森林や海水、湖水などの自然環境を 守るためなら、便利さや快適さを犠 牲にしてもかまわない	.908
ニ. 地球温暖化やオゾン層破壊を防ぐ ためなら、便利さや快適さを犠牲に してもかまわない	.899
ホ. 野生動物の絶滅を防ぐためなら、便 利さや快適さを犠牲にしてもかまわ ない	.787

第4表 環境保護意識の寄与率

成分	固有値	累積%
1	3.011	60.222
2	.945	79.128
3	.540	89.926

子どもの頃の家庭における自然体験については、宮川(2009)や浅香(2010)を参考にし、「動植物飼育」「山菜収穫」「昔の遊び(竹とんぼなど)」「昆虫採集」の4つについて体験しているものをすべて選択して回答してもらった。小学校における自然体験についても同様に聞いた⁽⁴⁾。第5表の単純集計によれば、家族での自然体験よりも、学校の自然体験のほうが多いという回答傾向がみられる。

自然体験の項目についても主成分分析を施した。結果は、次の通りである（第6、7表）。第6表、第7表によれば、子どもの頃の自然体験の質問項目において、2つの主成分が抽出された。

第5表 子どもの頃の遊び単純集計%

	体験あり	体験なし
学校での動植物飼育	91.4	8.6
学校での山菜収穫	67.8	32.2
学校での昔の遊び	91.8	8.2
学校での昆虫採集	76.8	23.2
家族での動植物飼育	78.7	21.3
家族での山菜収穫	62.2	37.8
家族での昔の遊び	61.8	38.2
家族での昆虫採集	72.3	27.7

第6表 子どもの頃の遊び主成分分析

	成分	
	1	2
学校での動植物飼育	-.053	.753
学校での山菜収穫	.068	.679
学校での昔の遊び	.029	.671
学校での昆虫採集	.097	.622
家族での動植物飼育	.710	-.068
家族での山菜収穫	.744	.056
家族での昔の遊び	.756	.089
家族での昆虫採集	.746	.095

因子抽出法: 主成分分析, バリマックス回転

第7表 子どもの頃の遊び寄与率

成分	固有値	累積 %
1	2.203	27.537
2	1.890	51.163
3

以下、第1主成分を家族自然体験、第2主成分を学校自然体験として抽出し、主成分得点を用いてこの概念を数値化し、議論を進めてゆく。

家族関係については、「家族数」「兄弟数」「出生順」「しつけ」といった4つの観点から聞くことにした。家族数については、現在一人暮らしの場合は実家での自分を含めた家族の人数を挙げてもらった。選択肢は、「2人」から「6人」までのそれぞれの人数と、「7人以上」である(第8表参照)。兄弟の数については、回答者自身を含め、「1人」、「2人」、「3人以上」という選択肢を用意し、選択してもらった。兄弟の出生順位については、「あなたは何番目に生まれましたか」という質問で聞き、「1番目」、「2番目」、「3番目以降」という選択肢を用意して、選択してもらった⁽⁵⁾。なお後述する重回帰分析にあたっては、ダミー変数を用いている。具体的にいえば、家族人数については、「1人」から「4人」までを0と入力し、それ以外を1と入力した。この点については、2人から4人までの単純集計(第8表参照)が49.6%であり、5人以上が50.4%であるため、家族人数が「多い」「少ない」でカテゴリー化した。次に、兄弟数については、「1人」と「3人以上」について0もしくは1と入力し、分析に投入している。出生順についても同様である⁽⁶⁾。

第8表 家族構成の単純集計 % N=269

(人)	2	3	4	5	6	7~
家族構成	2.3	9.8	37.5	31.1	14.4	4.9
(人)	1	2	3~			
兄弟数	12.1	45.1	42.8			
兄弟順位	48.3	35.7	16.9			

しつけについては、保坂がこれまで行った調査で用いた質問を用いた⁽⁷⁾。「子どものころ、厳しいしつけを受けた経験がある」「厳しいしつけは納得がいかないものが多かった」の2つで聞き、回答は「A.そう思う」/「B.どちらかといえばそう思う」/「C.どちらかといえばそう思わない」/「D.そう思わない」の4分位を用いている。また、家族関係

ということで、家族間コミュニケーションのうち、父親と母親について聞いた。これについては、「父親とはよく話をした」「母親とはよく話をした」の2題で聞き、回答はしつけと同じく4分位で得た⁽⁸⁾。保坂が行った調査と単純集計との比較では、今回調査のほうが会話が増えているものの、しつけについてはほぼ同じ分布を示しているといえる⁽⁹⁾。

次節では、これまでで得られた尺度を用いて、実際に分析を進めることにしよう。

第9表 しつけについての単純回答 %

		A	B	C	D
父親会話	今回調査	39.6	26.9	24.2	9.2
	東京調査	16.6	20.9	33.1	29.5
母親会話	今回調査	65.4	26.2	5.4	3.1
	東京調査	41.3	33.3	17.6	7.8
厳しいしつけ	今回調査	26.2	30.0	30.0	13.8
	東京調査	29.9	27.8	26.3	16.0
不納得なしつけ	今回調査	9.6	18.8	41.5	30.0
	東京調査	8.5	13.9	38.4	39.3

Aは「そう思う」、Dは「そう思わない」

3. 環境保護行動と家族関係

環境保護意識に関しては、これまで保坂が数々の調査で用いてきているので、比較可能である。

第10表によれば、保坂が東京(2000)や北京(2004)で実施した一般市民調査よりも低い環境保護意識という傾向が得られている⁽¹⁰⁾。

第10表 環境保護意識イ~ホの回答加算比較 (%)

	A	B	C	D	計
学生調査 (2010:長崎)	105.3	245.1	120.0	30.1	500.5
学生調査 (2005:名古屋)	82.4	243.8	127.1	46.6	499.9
北京調査 (2004)	184.1	194.7	76.1	45.1	500.0
東京調査 (2000)	191.3	209.3	54.4	45.3	500.3
吉川調査 (1992:全国)	169.3	213.0	67.9	49.9	500.1

Aは「そう思う」、Dは「そう思わない」

既存の研究で、環境保護意識に対する年齢の正の効果が見出されていることを踏まえれば(吉川[1998]),調査対象者の年齢が低い学生意識調査であ

ることが環境保護意識の低さの一因となっていると考えられる。

これまでに得た尺度を用いて、環境保護行動の形成要因に関し重回帰分析を用いて検討したのが第11表である。環境保護行動が子どもの頃の自然体験によって促進されるというモデルに関し、本稿ではさらに環境保護意識と家族関係についての変数を入れての分析となる。

モデル1では、家族での自然体験の形成について性および家族関係の変数を投入した。モデル2では、学校での自然体験の形成について、モデル1の変数を投入し、モデル3では環境保護意識の形成要因についてモデル2の変数を投入する。そしてモデル4では、環境保護行動の形成に関し、モデル3の変数を投入している。家族での自然体験がまず最初にあり、次に学校での自然体験がなされ、環境保護意識の形成につながると想定してモデルを作成した。

順に見ていくことにしよう。モデル1から、「家族での自然体験」は、兄弟数3人から正の効果(.191)を得ている。兄弟数が3人以上いるほうが、家族での自然体験が多くなるということになる。また、しつけについては、「厳しいしつけ」から正の効果を受けている。しかし、「不納得なしつけ」ではなかった。自然体験は、子どもが納得する範囲での厳しいしつけを行う家族で多くなるということになるだろう。性や家族人数、出生順は特に効果がみられなかった。

次にモデル2から、「学校での自然体験」は、「厳しいしつけ」によって促進され、兄弟数1人によって阻害される。一人っ子だと積極的に学校行事に参加しなかったと本人が感じているといえる。

モデル3であるが、環境保護意識も兄弟数によって影響を受けていることが明らかになった。兄弟数が1人であることが、環境保護意識を阻害するのである。とはいえ、環境保護意識に対する家族での自然体験は効果がみられなかった。兄弟数のみ環境保護意識に関係するという点について、質的調査によって補足調査が必要であるだろう。筆者らの見解を述べるとすれば、たとえば環境を保護しようとする意識は、自然への共感ともいえ、親とは異なる兄弟という存在が、生き物自体に対する共感を育むという可能性があるだろう。この筆者らの解釈については、榎澤令子らの研究が参考になる。榎澤は、大学生を対象として、兄弟数や出生順を交えつつ、過去に弟妹の面倒をみた経験が、成長してから小さな子どもに対する共感を促進するかどうかについて量的調査で検討し、次のような指摘をしている。「弟妹

との遊びや学習の中で自分の説明のモニタリングをしたり、相手に共感することによって、自信やコンピテンス感を高め、それが強化されて繰り返され、小さい子どもへの共感や技能に関係していく」(榎澤[2009:176])。榎澤の指摘は、対人間関係をめぐってのものであるが、「弱い立場」を環境にあてはめて考えれば、今回調査で得られた環境保護意識と兄弟数の関係について理解が容易になるだろう。

第11表 重回帰分析：(ステップワイズ法)

	モデル1 家族自然	モデル2 学校自然	モデル3 環境意識	モデル4 環境行動
性別※ 男=1	—	—	—	-.253**
家族人数※	—	—	—	—
兄弟数1人※	—	-.197**	-.155*	—
兄弟数3人※	.191**	—	—	—
出生順1番※	—	—	—	.198*
出生順3番※	—	—	—	—
父親と会話	—	—	—	—
母親と会話	—	—	—	—
厳しいしつけ	.125*	.126*	—	—
不納得なしつけ	—	—	—	—
家族自然体験	—	—	—	.141*
学校自然体験	—	—	—	.122*
環境保護意識	—	—	—	.220**
調整済決定係数	.041**	.046**	.020*	.185**

**p<.01, *p<.05

※ダミー変数

「—」は除外された変数、空欄は未投入の変数。

最後にモデル4であるが、環境保護行動は、性(負の効果)、環境保護意識(正の効果)に加え、家族自然体験(正の効果)、学校自然体験(正の効果)に加え、出生順(1番だと正の効果)がみられている。環境保護行動が、環境保護意識や家族自然体験によって効果を受けていることは、これまでの論者らの指摘を踏まえても推測がつくが、出生順によっても直接に効果を得ていることは、環境保護行動を考察するにあたって家族関係が重要な視点になるということを示しているだろう。

出生順が1番であるほうが環境保護行動をとることについては、2番以下と異なり、1人で生活環境を整えたり、弟妹の面倒をみたりで、長らく生活を自ら切り開く必要があり、新たなライフスタイル(たとえばエコバックの持参)に意欲的に取り組むという解釈が考えられる。

もちろん、出生順が1番であることの環境保護行動に対する正の効果は、一人っ子にもあてはまり、一人っ子でも環境保護行動が高くなる可能性がある。そこで、兄弟数で平均値の比較をしてみることにした(第12表)。平均値については、それぞれの主成分得点について、数値を平均50、標準偏差10の偏差値得点に換算したものである。

第12表 兄弟数の平均値比較 N=262

	人	平均値	多重比較 ※
家族自然	1	47.1	a
	2	48.7	a
	3~	52.1	b
	合計	50.0	**
学校自然	1	45.0	a
	2	49.9	b
	3~	51.5	b
	合計	50.0	**
環境意識	1	46.3	a
	2	50.0	
	3~	51.5	b
	合計	50.2	*
環境行動	1	47.1	
	2	50.3	
	3~	50.5	
	合計	50.0	ns.

**p<.01, *p<.05

※最小有意差：違う英文字間に有意な差

第12表によれば、環境保護行動の得点は、兄弟数では有意な差がみられなかった。むしろ、一人っ子において、環境保護行動を促進する「家族自然」「学校自然」「環境保護意識」といった項目で、平均値が低い傾向がみられる。

これまでみてきたように、環境保護行動に家族構成が大きな効果を持っていることが明らかになった。環境保護行動を促進する家族での自然体験は、兄弟数によって影響を受け、さらには環境保護行動自体も兄弟構成によって影響を受けるのである。また、環境保護行動は、兄弟数に関係のある環境保護意識に促進される。家族構成という単純な事実が環境保護行動と関係があるのである。明らかになった結果をまとめれば、環境保護行動を積極的にする人物像として、兄弟数が多い長女ということになる。

4. おわりに

以上みてきたように、環境保護行動を検討するにあたっては、環境保護意識や家族自然体験、学校自然体験といった観点に加え、家族関係、とくに兄弟数や出生順について検討する必要がある。とりわけ、環境保護行動を促進する家族自然体験に対する3人以上兄弟の正の効果、環境保護意識に対する一人っ子の負の効果は、少子化の日本にあって、環境保護行動に対する警鐘を鳴らすといえる。兄弟が多い方が、家族での自然体験の機会を増やし、環境保護意識を高め、ひいては環境保護行動を促進する。少子化は、環境保護にとって問題のある社会現象になる可能性がある。

本稿で得られた知見は、環境問題を論じるときに避けて通れない中国を分析する際にも意義があるだろう。本稿で得られた知見を敷衍すれば、中国において一人っ子政策の推進は、環境保護行動を阻害する可能性があるということになる。もちろん、この点についての分析は、中国で実際に量的調査のデータを集めて検討する必要がある。

もっとも、本稿の検討課題はさまざまにある。まず本稿での検討は学生を対象とした調査であり、知見を一般化しえない。しかし、個人情報保護意識の高まりで、一般市民を対象としたアンケート調査で家族構成を聞くのにはハードルが高く、詳細な意識分析を家族構成の観点から検討するには、大学生を対象としたアンケート調査は意義があるだろう。質問項目の課題についていえば、本稿で測定している環境保護行動はエコバックの持参など日頃行えるような環境保護行動であり、環境政策を策定することで環境保護行動を結果的に推進するといった論点は含んでおらず、さまざまな環境保護行動の検討をすることは今後の課題となるだろう。出生順や兄弟数と自然体験の関係についても、出生順が1番であることがライフスタイルを切り開くという解釈に関し、親の仕事形態や収入を合わせて検討する必要がある可能性もある。さらにいえば、第11表のモデル1において「兄弟数3人」と「家族自然」の有意な関係が得られているが、本稿で用いたモデルには、家族の階層や豊かさといった変数が投入されていない。このため、兄弟数が多いほど自然体験が多いことの理由として、家庭が豊かであることから兄弟数が多くなり、ゆとりがあることから環境意識が高くなるという解釈も可能であるかもしれない。今回得られた結果について、質的調査によって補足調査することで、「自然体験」への思い出と環境保護行動と

の具体的関連が見出せることもあり得る。また、少子化は人口が減少することから、廃棄物の減少につながり、環境保護行動に取り組みなくても少子化自体が環境保護につながるという考え方もあるかもしれない。

もちろん、少子化に伴う外国人労働者の導入など、少子化自体が環境保護に直接につながるとは必ずしも限らないが、少なくとも少子化現象に即した環境教育、たとえばこれまで兄弟で体験してきた自然体験を教育の現場が担うなどの対策が求められる。そして対策を考えるにあたって、これまで本稿でみてきたように、学校での自然体験は、一人っ子でないこと自体で促進されるのであり、兄弟数を考慮した教育が求められるのである。

【注】

- 1) これまでの環境教育に関する研究は、義務教育以上が中心であり（たとえば沼田 [1982]）、幼児期の環境教育に関する研究はほとんどなかった。なお戦後日本の環境教育を考えた場合、公害教育を起源としている。公害教育は、1968年に国会で質問があったのをきっかけに推進されたが、義務教育の社会科の中で行われる限られたものであった（沼田[1982:5]）。野外自主保育の実際については、保坂・猿田(2006)を参照のこと。
- 2) 本稿では、「兄弟姉妹」を略して、「兄弟」という表記を用いることにする。
- 3) 記憶と体験を正確に対応させた研究は、質的研究で実施できる可能性があるが、機会を改めて取り組みたい。
- 4) 宮川は小学校の自然体験についても聞いているが、「理科の実験・観察は好きだったか」の1題で測定している。本稿では、家庭での自然体験と同じ質問項目を用いている。なお、「はじめに」でも触れたように、「子どもの頃」の年齢についていえば、宮川も浅香も「小学校」としているが、本稿では幼少期も含め、対象期間を長く設定した。
- 5) 家族数については「7人以上」、兄弟数については「3人以上」という選択肢にしているのは、大家族や大兄弟は数が少なくなり個人が特定される可能性を避けるためである。
- 6) 「1人」と「2人」について0もしくは1と入力して分析した重回帰分析も今回の結果を支持しているが、重複するためデータは掲載しない
- 7) しつけの調査についての質問項目を収録した東京調査(2000)は2000年8月に実施された。調査対

象は、東京都の30歳以上70歳未満の男女有権者個人を母集団として、層化2段無作為抽出法（確率比例抽出法）により2400人を抽出し、郵送回収法で行った。有効回答者数は888(有効回答率37.0%)であった。詳細は、保坂(2002a) (2002b)を参照のこと。

- 8) 兄弟との会話については調査票の簡素化のため聞かなかったが、本稿の結論を踏まえれば、次回調査の時には収録する必要があると考える。
- 9) 調査実施時期や、調査対象が相違しているにも拘わらず、しつけについては大差ないというのは興味深い。機会を改めて検討したい。
- 10) 北京調査(2004)の詳細は保坂(2009)、名古屋調査の詳細は保坂(2005)を参照のこと。

【参考文献】

- 朝香英昭, 小瀬博之, 2010, 「小学校ビオトープが中学生の環境意識に及ぼす影響」『研究報告集 1』(74), 523-526, 社団法人日本建築学会。
- 広瀬幸雄, 1995, 『環境と消費の社会心理学』, 名古屋大学出版会。
- 保坂稔, 2002a, 「権威主義的性格と環境保護意識 — 破壊性の観点を中心に —」『社会学評論』, 日本社会学会, 53(1): 70-84。
- , 2002b, 「権威主義的性格と子どもの頃の親子関係」『ソシオロジ』第144号, 109-125。
- , 2005, 「社会保障問題における選別意識 — 環境・社会保障に関する学生意識調査を事例として —」『名古屋大学社会学論集』第26号, pp.203-218。
- , 2009, 「環境保護意識に対する社区の意義 — 北京市T区のデータ分析から —」『環境社会学研究』第15号, 環境社会学会, 119-131。
- 保坂稔, 猿田佳恵子, 2006, 「野外自主保育の展開と継承 — 環境教育の社会運動論的分析への試み —」『上智大学社会学論集』第30号, 27-41。
- 細野一郎, 2004, 「環境とは何か」『保育内容シリーズ第3巻 環境』細野一郎編, 一藝社。
- 今泉みね子, アンネッテ・マイザー, 2003, 『森の幼稚園 — シュテルンバルトがくれたすてきなお話 —』, 合同出版。
- 吉川徹, 1998, 『階層・教育と社会意識の形成』ミネルヴァ書房。
- 榎澤令子, 福本俊, 岩立志津夫, 2009, 「大学生における過去の被養護・養護体験が現在の養護性(nurturance)へ及ぼす影響」『教育心理学研究』

57(2), 168-179, 日本教育心理学会。

宮川雅充, 井勝久喜, 諸岡浩子, 廣田陽子, 土生真弘, 青山勲, 2009, 「環境配慮行動および社会活動の実践と子どもの頃との関連 — 岡山県の大学生を対象とした質問紙調査 —」『吉備国際大学研究紀要』(19), 37-46。

宮川雅充, 井勝久喜, 諸岡浩子, 廣田陽子, 土生真弘, 青山勲, 2010, 「環境配慮行動および社会活動の実践と生き方志向との関係 — 岡山県の大学生を対象とした質問紙調査 —」『吉備国際大学研究紀要』(20), 47-55。

無漏田芳信, 栗村仁視, 柿原宏美, 酒井要, 2003, 「環境イベント「家族環境小学校」の参加状況と環境意識：地域施設の活用とコミュニティ再生に関する研究・その2(建築計画)」『日本建築学会中国支部研究報告集』26, 649-652, 社団法人日本建築学会。

沼田真, 1982, 『環境教育論 — 人間と自然との関わり —』東海大学出版会。

岡田成弘, 岡村泰斗, 飯田稔 [他], 2008, 「少年期の組織キャンプにおける Significant Life Experiences が成人期の環境行動に及ぼす影響 — 花山キャンプを事例として —」『野外教育研究』12(1), 27-40, 日本野外教育学会。

田尻由美子, 1994, 「幼児の環境意識・態度形成に影響を及ぼす母親の生活行動に関する調査研究」『環境教育』4(1), 8-18。

立石裕二, 2008, 「環境問題の捉えかたの世代間差異と子どもころの記憶」『環境社会学研究』14, 101-118, 環境社会学会。